

まいど！ざいむ局です！



関西元気企業

いつか帰ってきます！丹後再生への約束
～食を通じた地方創生・地域活性化～

今回ご紹介する企業は、京都府京丹後市に所在する株式会社紫野和久傳です。

同社は、料亭「和久傳」の味を持ち帰ることができる『おもたせ』専門店です。また、京丹後の豊かな自然、恵みの海から生まれる山海の幸溢れるこの土地を生かした原材料の生産も行い、料亭が農業に進出した“逆”6次産業化にも取り組んでおられます。

一度は丹後地域から出たものの、いつか恩返しに必ず帰ってくるとの想いを実現した桑村さん。そんな桑村さんの現在までの道のりや経営理念、地方創生に対する思いに迫ります。

企業情報

名称 株式会社 紫野和久傳
所在地 京都府京丹後市久美浜町
谷 276-31
設立 2003年
代表取締役会長 桑村 綾
従業員 198名 資本金 10百万円
H P <http://www.wakuden.jp/>

●株式会社紫野和久傳設立までの道のりを教えてください

当社は、明治3年に京都北部の京丹後・峰山町にて、和久屋傳右エ門と妻のお久が開いた料理旅館がはじまりです。同地域は、江戸時代から丹後縮緬の交易地として栄え、全国から生糸を売りに来る商人や丹後縮緬を買いに来る人達が集まっていました。和久傳は商人達の定宿や会合の場として利用され、縮緬産業とともに百年以上の賑わいが続きました。

しかしながら、昭和2年の丹後大震災や社会構造の変化に伴う丹後縮緬の衰退から、旅館としての経営が苦しくなり、和久傳を守るために京都進出を決意しました。

地元を離れることにとっても悩みましたが、「地元を捨てるのではない。いつか地元に戻り、恩返しをする。いつか必ず帰ってくる。」と自分自身を納得させ、背水の陣で京都進出を決意しました。大変ではありましたが、昭和57年に「高台寺和久傳」、平成2年に「室町和久傳」を開店するなど、事業を拡大していきました。

そんな中、大徳寺の門前でテイクアウトのお弁当を販売する紫野和久傳を開店しました。食を預かるものとして地球環境にも配慮しなければと、陶器を使った『陶器弁当』を作り、JR京都伊勢丹にも出店するなど、紫野和久傳の発展のきっかけとなりました。

平成15年には、紫野和久傳で取り扱っていた弁当や菓子などの『おもたせ』を販売する「株式会社紫野和久傳」を設立しました。料理屋をしながら物販もするのではなく、料理屋が物販に特化した会社を設立するという強い想いで、料亭部門と物販部門に分社化しました。同年に、東京の丸の内に茶菓席を併設した「丸の内店」や、二子玉川高島屋S.C.にも出店しました。現在、12店舗の物販店とオンラインショップなどを通じて『おもたせ』を販売しています。



株式会社紫野和久傳
桑村さん

●苦渋の決断の中で京都に進出し、いかにして京丹後に戻られたのですか

平成17年から紫野和久傳の商品は京都市内の自家で作っていましたが、手狭となったことから新たな食品工房建設が課題となりました。これを機に創業の地である京丹後へ戻ろうと考えました。

平成19年に土地探しから始まる、京丹後・久美浜工房竣工へ向けた動きが始まりました。丹後を出てから25年目にして、ずっと心の中にあった丹後への思いが果たせる機会に恵まれたのです。

●工房の設立にあたってのお考えを教えてください



和久傳の森

食品工房だけなら三百坪ほどで十分でしたが、隣接地とお互い迷惑をかけあってもいけないとの思いと、何より自然環境の良いところに食品工房を建てたい思いがありましたので、八千坪の土地を準備しました。

工房以外の敷地の活用を考えている折、「植樹をしてはどうか」と助言をくださる方があり、平成19年に全国からのお客様・地元の方々・従業員を含めて総勢1,600人が集まり、56種類の

木々の苗を18,000本植えました。さらに、同年9月には従業員だけで2,000本植え、計20,000本の植樹をして『和久傳の森』が誕生しました。「癒しの森」「交流の森」「文化の森」「生産の森」として地域の方々、来場者、従業員に愛され、永く親しまれる森として、和久傳の夢が動き始めました。

また、京丹後の豊かな自然、恵みの海から生まれる山海の幸溢れるこの土地の利を生かし、より安心・安全のためのものづくりを行いたいと考え、生産から販売まで一貫した6次産業化を目指すことにしました。6次産業化といえば一般的には、営農者が主体で加工や流通まで手がけることを指しますが、和久傳はすでに加工・販売を主にしていましたので、川下から遡って農業を手がける、川下発の“逆”6次産業化です。『和久傳の森』の中や周辺では、当社商品の原材料となる食材（山椒・柿・梅・柚子・オリーブ・小豆・米など）を、地元の農家の方々との共同生産も行いながら、数多く育てています。

平成28年には『和久傳の森』十周年を迎え、特別公演として「坂東玉三郎がいざなう鼓童の世界」を和久傳の森にて開催しました。この特別講演がきっかけとなり、1か月後には京丹後文化会館にて、「坂東玉三郎京丹後特別舞踊公演」を開催して下さいました。今後も継続すべく、町の若手メンバーで実行委員会を組む、京丹後市一丸となり地域を盛り上げていく段取りを致しております。

●森を育てるだけでなく、地域の『ひと』を育てる活動もされているようですね

「森も人間も同じ。苗のうち、子どものうちから時間をかけて育てなあかん。」植樹した木が大きくなるには、20-30年かかります。人も同じだと気づき、子ども達が木のように大きく育てば、丹後地域も、従業員も変わっていくと思ったのです。

そんな中、安岡正篤先生のお孫さんである安岡定子先生が開かれていた『こども論語塾』を知り、安岡先生のお力をかりて平成20年から和久傳の久美浜工房で2ヶ月に1回、地域の子供を対象とした『こども論語塾』を開催しました。



子ども論語塾

「論語で学んだことが、いつか人生の助けになるように。今すぐに意味が分からなくても大丈夫。普段から素読することが大切です。大きな声で繰り返しましょう。」と子ども達に寄り添ってご指導下さいました。現在は峰山町の金刀比羅神社と京都市の大徳寺で開催しており、町の有志の方々が引き継いで行ってくださっています。

子どもたちが大きく育ち、丹後地域を盛り上げていってくれればと楽しみにしています。

●地方での働き方についてお聞かせください



京丹後久美浜第二工房

おかげさまで平成27年には京丹後久美浜第二工房が竣工しました。工房に訪れた人に手作業の行程を気軽に見てもらい、こんな働き方もあると知って頂けるよう、見学もして頂ける工房に致しました。

また、高齢者のノウハウを若者に伝え、高齢者も元気になってもらいたいと考えています。地方が元気になるには、女性や若者の参画はもちろんのこと、60代・70代の高齢者のノウハウを活用しないとイケません。何より、地域の元気な高齢者の方々の力をお借りしないと駄目だと思います。

当社では、70歳から90歳までの方を『しゃべり場』としてパート募集し、平成28年12月末時点で12名の方に働いて頂いています。じっと家に引きこもってテレビを見ている生活習慣を変えて頂き、地域交流を含めた新しい雇用の場をつくることにも取り組んでいます。国や行政に頼るだけでなく、「自助努力なしには、地方創生はなし得ない。」との意識で、これからも取り組みを続けてまいります。

●地方創生・地域の活性化への想いをお聞かせください

いつの時代も、日本を変えてきたのは地方です。地方創生・地域の活性化には国や府県も総力を挙げて取り組んで下さっていますから、地方が頑張らないとイケません。これから取り組むべきことは、地元の人が力強く、自分たちの手でこの地域を盛り上げたいと思えるよう、いかに共に進むかだと感じています。

丹後地域から京都へ出た和久傳が、京都で培ったビジネスのノウハウを持って、川下からの“逆”6次産業化を目指す為に丹後地域に戻ってきました。地元への恩返しの想いもございしますが、ビジネスをその地に求め、地域の方々と自分たちの手で創りあげていくことが何よりの地方創生につながると思っています。

今後は地方にいたるだけではなく、地方から都会に移り住んで仕事をし、生活をする事で得られたもの・経験を持った人々が地方に戻り、暮らし、自分たちの手で地方を創生していく。その気概を持つことが、本来の地方創生につながるのだと信じています。そのために、地方と都会の交流を促すこと、そのような人材や雇用を生み出すような国や府県の支援が必要だと考えています。

●今後の目標をお聞かせください

いつも心にあった京丹後の活性化に向けて、物事を自分の都合良く解釈してはいけないと思っています。儲けるだけでは薄っぺらなものになります。自分の職業を通じて創造し、活性して自助努力をしなければならぬという信念をもって進むことが、その何年後、何十年後かに実り、結ばれて点が線となり、形となってほしいと願っています。

和久傳にとっての次なる夢は、『和久傳の森』に、美術館とレストランを併設することです（平

成 29 年春に建設予定)。やわらかな画風で知られる安野光雅先生の作品を展示する「森の中の小さな家」と称した美術館を、安藤忠雄先生による設計で建設を予定しています。文化・芸術での地域おこしを行い、京丹後の食材の魅力を和久傳の味でお楽しみいただけるレストランを開店したいと考えています。

文化の力をかりて、お客様に地方へ来ていただき、地元の方々との交流が生まれ、その交流から新たな活性が生まれることに地方創生の希望があると感じております。また、企業主体の農業法人など、京都の北からの夢はまだまだ膨らむばかりです。

<取材後記>

工房を見学させていただいた際に、ほとんど全ての工程が手作業であることに驚きました。原材料の形や大きさは千差万別のため、機械では品質の維持が難しく、昔ながらの手作業を貫いていました。機械化がすすむ昨今。省力化も必要なことですが、“機械化すべきところと、変えるべきではないところ”の見極めが肝要と感じました。

また、一つ一つを丁寧に手作りしながら、生き生きと仕事されている職員の方々の姿が印象的でした。地元の若者から高齢者まで様々な年代の方々が一緒に仕事をされており、地域の『ひと』と『しごと』の活性化につながっている姿だと思います。

会社を守るために一度は後にした地元へ恩返しをする。その地域を出たからこそできること・気づいたことがあり、それを地域に還元することで『まち』の活性化につながっていくのだと思います。個人ではなく企業でリターンをした当社の取組みと、「いつか必ず帰るんだ」との強い信念を実現した姿に、地方創生のヒントがあるように感じられます。

当社のように地域活性化のために尽力されている企業に対し、当局でも支援できることがないか、日々模索していきたいと思っております。

(近畿財務局総務部総務課企画係 係長)

掲載している情報は、平成 28 年 12 月末時点のものです。

掲載している写真は、同社よりご提供いただきました。